
定食屋にて

Joker02

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
定食屋にて

【コード】
N2623V

【作者名】
Joker02

【あらすじ】
源と石田が定食屋にて

(前書き)

過去作品です。

「おい源。^{みやもと}マヨネーズは森羅万象何にでも対応できる、オールマイティーアイテムなんだよ。」

俺の悪友石田がレストランで二人で食事中にそうやってきた。彼は生粋のマヨラーだ。ただのマヨラーではない。デザートにまでマヨネーズをかけ、修学旅行（二泊三日）に業務用のマヨネーズを三本（一日一本ペース）持ってきて使い切り、「もつと持ってくればよかつた〜！」と嘆くほどのマヨラーだ。しかし、彼にそのわけわかんない思考とヘタレな二重人格持ち^{イッシー}ということを除けばバレンタインでかなりのチョコを貰うほどのイケメンだ。・・・まあ、マヨ好きということが有名なのでチョコではなくマヨネーズなうえ、基本上記の理由で毎年親からしかもらえないという残念な落ちなんだが・・・。

今もマヨてんこ盛りステーキをおかずにマヨてんこ盛り白米（彼曰く、ステーキ定食石田スペシャル、使用マヨ通常ボトル五本分）を食べているところだ。

「そんな犬の餌みたいなもん食べながらいわれても説得力ゼロなんだよ」

まったく、せつかくの晩飯がまずくなるじゃないか。

「いや、そんな甘味尽くしの甘ったるいメニュー食ってるお前には言われたくないんだけど!？」

「何だと!？コラー!」

失礼な。ちなみに俺が食っているものは白米に餡子をかけた金時井（自作）とイチゴパフェ、最後にイチゴ牛乳だ。

「そんなんだから中学生なのに糖尿っ気があるんだろーが!」

「うるせーよ!まだ自覚ありなんだからましだろ!」

「自覚あんのかよ!じゃあやめるよ!」

「やめられねーし、やめる気ゼロだから食ってるんだろーが!」

ちなみにこの前俺の主治医も諦めました。

「ったく。・・・おい何してんだ石田。」

そうこうしてるうち石田がイチゴパフェ（俺の）を自分のほうに寄せる。

「（何をやる気だ？）」

すると石田は何かを取り出した。もちろん・・・マヨネーズだ。

「（え？まさか・・・）」

次の瞬間石田はパフェにマヨネーズをぶちまけた！

「ああああああ！ふざけんな！」

「お前にマヨネーズの良さを教えてやろうとしてるんじゃないか！人それをおせっかいという。というか、この場合は完全に嫌がらせだ。」

「ん？マヨが切れたか・・・まだ足りんな。」

「誰か！こいつを止めて！」

しかし絶叫むなく・・・

「よし！完成だ！石田スペシャルパフェバージョン！」

完成したのはもう明らかにパフェではない何かだった。

使用ボトル二本半

「ちよつと殴つていいですか？」

今日ぼくは殺意を抱くということを物理的に体験しました。

「絶対うまいから食ってみろ！」

石田が聞いてくるこたえは当然・・・

「まずいわ！」

バンツ（俺が机をたたく音）

「そんなこと言っただけで食べよ！」

「お前が食べ！犬の餌を！」

チツ、こいつには教えたほうが良いようだ。

「いいか？太古の昔から 炭水化物と甘いものは合うとされてる」

とを知らねえのか？石田君よオ

あんぱんしかり、ケーキしかり、大福しかりよ。」

そういえば、秋田県は炊き込みご飯とか、とにかく食べモノがとんでもなく甘いんだっけ……

引つ越そうかな俺。

「そうかもしれないがマヨネーズが森羅万象なんにでも対応できるのは事実であって……」

「お前の中だけだよ。てんで話しになんねえなマジで狂った味覚だよな」お前。金時丼食べてみる！お前の味覚が変わってくから。俺もこのパフェ食ってやるから。」

……あれ？死亡フラグ立たなかった？今。

「ちっ、わかつたよ食ってやるよ。そのかわりおまえもくえよ！」

「お、おう……。」

やばい……完全に死亡フラグだ……。

「（パクツ）」

二人同時に結構な量を食べる。

そして……

「~~~~~ツツ！！！！」

二人でトイレに駆け込んだ。

数分後

「あゝ吐きそうだ。源、お前の味覚狂ってるって。」

「お前だけには言われたくなかったよ……。」

石田に言い返す。

「あゝ愛しいな。マヨネー言わせねえよ！！」

石田が言いかけた時、完全に怒りが爆発した。

「お前にだけは甘味を否定されたくない！あのな、ちよつと聞いとけ大事な事！パフェとか小豆はさあ、まじで神なんだぜ！」

「だって我慢できないんだよ、そもそもお前があんなの食ってたか

らだろ!？」

「てめっ!人のせいにするんじゃないねえ!」

もう限界だ。石田を一発殴る。

「痛い痛いから叩かないで!源君、やめるでござるよ!」

「いやちよつとまで!この口調はイッシーだな!なんで出てきた!？」

なんでこのタイミングで性格が入れ替わるんだ?

「いや、どうやら主人格の意識が飛んだらしくて・・・」

「ただけじゃなかったんだ・・・」

自分がいつも食っているだけあつてすこしへこむな。

こうして、俺はイッシーの意識を殴って飛ばし悪友の生還を待った。

数分後

「ひどい目に会った・・・」

「お疲れ様。けど原因はお前のせいだぞ。」

「なんだと!？」

悪友の労をねぎらうが言い返された。

・・・こいつがパフェにマヨかけなければこんなことにはならなかった気がするんだけど・・・

席に戻ると待っていたのは・・・

「やっぱ、これが・・・。」

「だな。」

石田スペシャルパフェバージョンやその他もろもろだ。

「食つか。」

「ああ。」

さすがにこんなに残したまま帰るのは忍びない。

「はゝああ・・・(パクッ)」「」

二人同時にまずいこと前提で覚悟して食べる。

しかし・・・

「あれ？意外にうまい・・・」

「こつちもだ・・・」

なんとうまい。

「まさか・・・」

そういうとおれはイチゴ牛乳にマヨネーズをかけて（入れて）、石田は石田スペシャルパフェバージョンをそれぞれ食べた。

「あれ意外に合うんじゃない？」「
なんと二人ともうまいと感じた。

「お、おいマヨネーズあまってない？」

「ああ、あるぞ。そっちは餡子あまってない？」

二人でそれぞれMYマヨとMY餡子をトレードする。

そしてすべての料理に追加し食べる。

「うめえな 酸味と甘味！。というか、全部うめえじゃねえか！」

「こんな味覚どうなんだろうな？」

「俺らの中では全然問題ないな。」

石田の質問に意見を言う俺。

俺は今までこんなに素晴らしいものを食べたことがなかったなんてバカだったんだろう！

近くから「あの二人の味覚崩壊してない？」なんて声や、「味覚が狂ってるぞ、あの二人・・・」なんて声がしたが、俺らは気にせずそのあと全部食べきった。

数日後

「アハハハハハハハ」

俺らはあの後かなり仲が良くなり今日もレストランにやってきていた。

ついでに俺らはかなり重度の甘党兼マヨラーになっていた。

「じゃ、今日もマヨネーズぶっかけるか！店員さん！マヨネーズ単品30本！」

「なあ、飯にパフェとマヨネーズかけたらうまそうじゃね？」

「おお、うまそうだな！じゃあ、パフェ二つとドンブリご飯二つ。あとマヨネーズもう三十本追加で！」

「か、かしこまりました・・・。」

若干店員さんが引いていた気がするが、まあ気のせいだろう。こうして、また楽しい夕食が始まった。

・・・味覚が崩壊した気がするが、まあ、気のせいだろう。

(後書き)

気付いた方もいるかもしれませんがこの小説の元ネタは<http://www.nicovideo.jp/watch/sm12927883> A24氏作 【銀魂】パフェマヨリヨシカ【歌ってみた】

去年学校の授業で歌を題材に小説作れと無茶ぶりされたので自棄^{やけ}になつて作ったものです。

先生に小説を見せるとむちゃくちゃうけてました。

しかし代償として自分のクラスだけではなく他クラスでさらされましたwww

最後にA24氏勝手に使つてすみません。ここでお詫びします。

ご意見ご感想おまいしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2623v/>

定食屋にて

2011年8月5日03時23分発行